

東海沖地震の時、7 mの津波に襲われるとされており、海岸に堤防を築き始めた。しかし、堤防によって海が見えなくなる、景観が損なわれるという観光業者の苦情や、費用が大変かかることから、作業は、はかどっていないようだ。

この日の賀茂村版の新聞で、私たちの巡検のことが、なんとトップニュースだった。

2日目は黄金崎から安良里港へ向かった。安良里港には冷凍庫などの設備がないため、水揚げは沼津などにするそうだ。船の乗組員は現在減少しており、高齢化がすすんでいる。私たちが安良里港に着いた時に丁度、広洋丸の進水式が行われていた。船は、港から少し出て戻ってくるのだが、その時に紅白のおもちを岸へ投げることになっている。人が続々と集まってきて、おもちが投げられるのを待ち受けていた。私たちもビニール袋を渡されて、地元の方と一緒に必死になって拾った。

安良里で、私は初めてなまこ壁というものを見た。独特の雰囲気をもったものだった。色は白と黒で、白の部分が盛り上がっている。規則正しい模様が、かえって不気味に感じられた。ここで賀茂村の方と別れ、松崎町へ向かった。

松崎町も賀茂村と同様に、観光業に力を入れているそうだ。説明を伺っている時に、松崎町の観光業は軌道にのったという自信のようなものが感じられた。役場で、今日巡る予定の場所を含めて

説明していただいた後、実際に現地へ出発した。この時も、役場の方が同行して下さった。役場付近には、なまこ壁の家や、なまこ壁の欄干などがあり、なまこ壁にも慣れた。

桜葉漬工場では、高さ190cmほどの樽が並んでいて、圧倒された。この樽の中で桜の葉を1ヶ月位塩漬けにしておき、機械で1時間ほど圧力をかけて製品になるそうだ。この桜の葉は和菓子に使われる。ここで使う桜の葉は、近くに山桜の畑をつくり、そこから回収しているということだ。

和洋折衷の建築である岩科学校を見てから（ここでもなまこ壁を見た。）岩地のマーガレット栽培地、雲見の民宿「高見屋」と巡った。雲見では、現在は後継者の心配がないが、三代目が継ぐかどうかには不安が残るようだ。

この後、景色を楽しみながら、波勝崎（野生の猿がいた）奥石廊、そして解散場所の下田へ、午後5時近くに着いた。

今回の巡検では、海岸地形の話や、様々な土地の利用の仕方、地図と現場を照らし合わせるなど、内容が盛りだくさんだった。また、この地方の地名の難しさに驚いた。聞いた地名がなかなか地図で探せなかった。なお、バスに乗っていただけで疲れてしまった自分の体力のなさも実感した。

（10月7日～8日 式教官指導）

## 三浦半島巡検

大 川 聖 美

あいにくの空模様であった。時折降る雨に傘をかざして歩くのは、なんとも煩わしい。しかし自然地理学の巡検では、「雨の城ヶ島」などと洒落込むわけにもいかない。こうして、私達の三浦半島巡検は開始された。御指導は浅海先生にいただく。主な観察事項は、単斜構造からなる三浦層群の一部である三崎層と、辺り一帯の海食による地形的特色であった。

まずは、京急三崎口駅からバスで城ヶ島に向かう。降車後、バス停付近で三崎層の走向及び傾斜

を測定。みんなクリノメーターを思うように操れないでいる。当て方すらおぼつかない。頭でわかっているつもりでも、実際使ってみると意外にも自分の知識の甘さに気付く。実施体験は重要である。昼食後は、島の南部の入江へ。そこには事前学習のスライドで自分が最も興味を持っていた、ケスタ状の海食面が広がっていた。三崎層は、ゲンブ岩（黒色）とアンザン岩（灰白色）の互層になっている。それは傾斜が60度ほどあるので、軟質のアンザン岩は波に削られ、硬いゲンブ岩が

残って、階段状の海食面をつくるということであった。こんな身近に、このような地形学的にも面白い場所があるとは、思ってもみなかった。その後、台地に上った。登ると言ってもこれが一筋縄ではいかないものであった。きちんとした道とは思えないような傾斜面をよじ登ることになったのである。降雨で地面はぬかるみ、ともすれば滑り落ちそうになるのを周囲の草につかまりつかまり、必死の思いで登ったのだ。浅海先生はこの程度のことはものともなさないご様子である。先頭を切ってせっせと登頂なさって、下から苦闘しながら上がってくる私達の姿をカメラに収めては、笑っていられた。ひと言、「これが楽しみなんだな。」このサバイバルには閉口している者もあったが、私自身は結構楽しんでしまっていたのである。台地上をしばらく歩く途中、沈水海岸線に沿う海食崖、表層土壌である「くろぼく」とその耕作風景を観察した。やがて、眼下に春海町を見降ろしつつ、城ヶ島大橋を渡る。集落の様子は、道が狭く入りくんでおり、人家は軒をつき合わずように並んでいて、実に漁村集落の特色をよく表

していると思った。三崎町・白石町を抜けて海外町へ。海外町では、偽層や漣痕の露頭を観る。漣痕はその形状が非常によく保存されていて驚いた。砂岩、シルト岩は保存されやすいということであった。いずれにせよ、これは第三紀の地層の堆積環境を知る上で、貴重な資料であることは間違いない。そして、この露頭の少し先の海岸道路沿いにも注目すべき大露頭があった。スランプ構造を持つものである。断層が入っていたが、地回り面をつなげると、典型的な褶曲型スランプであることがよくわかった。

以上で観察ポイントを全て終えたが、この頃にはみんなだいぶ疲れていたようで、帰りの車中は無口であった。今回の巡検では、ひたすら“観察”に徹し、実習を行ったという気もするが、自分の目で確かめ、体験することは、こんなにも理解を深めるものであるということを改めて感じた。そして私は、いつにない充実した気分満ちて、帰途についたのであった。

( 6月 9日 浅海教官指導)

## 古河巡検

宇田川 晶 子

7月15日、16日の古河巡検は、1年生にとって、初めての巡検だった。

7月15日の10時に、東陽町の改札口に、内藤先生と、一年生12人、二年生2人、院生2人が集合した。そこからバスで、新木場へと向かったのだが、夢の島に入った頃からの外の景色は、東京とは思えない程オープンスペースが広々と広がっていた。まず初めに、東京新木場木材商工協同組合で、木場についての総合的な説明を聞いた。

江戸大火後、材木を1ヶ所に集めて火災から守ろう、という教訓から作られたのが深川木場であったが、昭和40年代後半から、新規用地を求めることの困難や公害問題を解決するため今の新木場へ移転した。現在、およそ116万平方メートルの敷地に600以上の事業所が集まり、都内第1の木材団地を形成している。

次に、実際に取り扱われている木材を知るために、東京銘木市場で、倉庫に保管されている木材を見せてもらった。

バスで東陽町に戻って、午後からは浅草橋の洋傘業を見学した。東京都洋傘ショール商工協同組合で、洋傘業の概要を説明してもらった。

洋傘は、江戸末期に外国から輸入されて以来、生活の洋風化とともに著しい普及を示し、現在では生活必需品となっている。生産は、古道具屋が輸入品の修理をしたのが技術的基礎となっていて、明治10年頃には輸入材料をもとにした加工業者が現れてきた。材料から完成品までを国内で作り出せるようになったのは明治22年頃であり、それから国内需要も伸びていった。日本は、一時は生産、国内消費、輸出が世界一で、「洋傘産業の世界の三冠王」と呼ばれた。しかし、台湾などの生